聖心女子大学グローバル共生研究所 創設記念プレ・イベント

「黄金の林檎(Le Pommier d'Or)」完成記念シンポジウム
自然との共生 ― 古今東西

（2017 年 6 月 23 日開催）

報告書

聖心女子大学
グローバル共生研究所
Sacred Heart Institute for Sustainable Futures (SHISF)

はしがき

2017 年 3 月、聖心グローバルプラザ（聖心女子大学 4 号館）に「黄金の林檎（Le Pommier d'Or)」が誕生しました。世界各地の石から成る、縦 6 メートル、横 13 メートルのモザイク画です。

その壮大さゆえに、黄金色の林檎をたわわに実らせた大木は聖心女子大学の新たなキャンパスに突如として現れたかのような印象を受けるかもしれませんが、その萌芽は東日本大震災後の陸前高田市に見出せます。

震災後まもなくして被災した人々がホッとできる日常の空間がほしいという願いに応えるために、ユネスコと BASF 社と聖心女子大学との共同による被災地復興支援事業「心に笑顔」プロジェクトが始まりました。「黄金の林檎」の作者である田窪恭治氏はユネスコから委託を受け、陸前高田市の仮設図書館に「ふらっと広場」を地元の人々と聖心女子大学の学生たちと手作りで完成させた作家です。

また、この支援事業の一環として、同市内にある無住の松月寺に 1 ヶ月ほどこもり、被災地への思いを込めて完成させたのが六曲一双の屏風絵「陸前高田の林檎」です。この屏風絵は被災地のメッセージを携えて現在、聖心グローバルプラザのカフェ・ジャスミンに掲げられています。

その後、フランス大使公邸や信州の「いいづなアップルミュージアム」での赤い林檎をモチーフにした作品づくりを経て「黄金の林檎」は誕生しました。グローバル共生研究所が誕生することとなり、「共生」や「持続可能性」を象徴するような作品を創ってほしいというりクエストのもとに生まれた作品です。それまでは赤で描かれ続けていた林檎がなぜ黄金色になったのか、そこに込められた想いは何だったのか、林檎の中に種はあるのか・・・等々、「黄金の林檎」をめぐる問いは尽きません。

本冊子は、「黄金の林檎」の完成を祝して聖心女子大学グローバル共生研究所が主催したシンポジウムの記録です。田窪氏がこの作品の制作過程での想いを語り、日本を代表する美術史家である高階秀爾氏がリンゴを描いた絵画史上の名作について説いた第 1 部、聖心女子大学で造形美術教育を専門とする水島尚喜氏が美術と子どもについて語り、また田窪氏と水島氏、そして筆者を交えて「黄金の林檎」と教育について鼎談した第 2 部から成ります。

こうした記録をとおして、作家個人はどんな想いを込めてこの大作を創り上げたのか、また作品に内在する普遍的なメッセージとは何かなど、読者の皆様を「黄金の林檎」との対話にいざなうことができれば幸いです。

「黄金の林檎」完成記念シンポジウム企画チーム代表
聖心女子大学グローバル共生研究所・副所長
永田 佳之

ごあいさつ

聖心女子大学学長
岡崎淑子

皆さま、こんにちは。本日は聖心女子大学に新たにオープン致します「聖心女子大学グローバルプラザ」と、「聖心女子大学グローバル共生研究所」の開設記念のプレ・イベントと講演会およびシンポジウムにようこそおいでくださいました。

本日のテーマ、「自然との共生―古今東西」は、聖心グローバルプラザのエントランス中央に掲げられたモザイクタイルの壁画、田窪恭治先生による「黄金の林檎」の完成を記念したものでございます。ご関心をお持ちのお客さまがこのように大勢お集まりくださったことは本当に喜ばしく、感謝申し上げます。

ご存じの方も多いかと思いますが、田窪先生はフランスのノルマンディー地方で制作された「林檎の礼拝堂」の作者としても世界的に知られたアーティストでいらっしゃいまして、国内外でたくさんの賞を受賞しておられます。また、本学でも非常勤講師として学生たちが大変お世話になっており、田窪先生にグローバルプラザの建物の中央エントランスに共生をテーマにした「黄金の林檎」の作品を制作していただいたことは、私どもにとって大変光栄なことでございます。心より御礼を申し上げます。

このたびオープン致しました聖心女子大学のグローバルプラザおよびグローバル共生研究所が目指すものは、本学の教育理念に直接に基づいたものでございます。すなわち、世界の一員として連帯感、使命感を持ち、さまざまな違いを超えて人々と共に生きる人間を育成すること、そのための教育、研究、社会貢献を行うことでございます。

本日はあの「黄金の林檎」の大作に込められた、原作者・田窪先生の共生へのいろいろなお考えや思いを先生ご自身から直接にお聞かせいただけるということで、大変楽しみにしております。

また基調講演「リンゴをめぐる文化論」では、大原美術館の館長でいらっしゃり、日本の美術史研究の第一人者でいらっしゃいます高階秀爾先生にいらしていただき、絵画史における黄金のリンゴの意味をお話しいただけるということです。これもまたとない機会で、本当に心待ちにしておりました。

後半のシンポジウムでは、「黄金の林檎」の田窪先生と本学の教員2名が一緒に、共生という理念、それをさらに教育の実践の場でこのテーマにいかに取り組んでいくのかという話をさせていただきます。約 2 時間のプログラムでございますが、どうぞ皆さま、心ゆくまでお楽しみくださいませ。簡単でございますが、ごあいさつに代えさせていただきます。

本シンポジウムの趣旨

聖心女子大学
グローバル共生研究所副所長
永田佳之

本日は、「黄金の林檎（Le Pommier d'Or)」完成記念シンポジウム：自然との共生－古今東西」にお越しいただき、有り難うございます。本シンポジウムを開会するにあたり、企画の趣旨を本研究所で副所長を務めさせていただいている永田よりお伝え致します。

すでに本館の1階でご覧になった方々も多いかと思いますが、本日のプレ・イベントは「黄金の林檎」という巨大なモザイク画の誕生なくしてはなかったイベント、まさに出来事です。

あの大木は、ある林檎の木の種が偶然に広尾の地に落ちて生まれた木ではなく、その誕生には必然の過程がありました。

イベントを主催させていただいた聖心女子大学グローバル共生研究所はその名に付されております通り、「共生」を標榜しています。それを象徴するべく、とりわけ現代社会の「共生」のキーワードである持続可能性や生物多様性を意識した作品を作って下さい、という依頼のもとに、完成した大作です。

本日は、その作家である田窪恭治先生ご自身から、この作品に込められた意味や想いについて、そして美術史家の第一人者であり、大原美術館の館長をお務めの高階秀爾先生より、美術史上でのその意味・意義についてお聞かせいただけることを、とても楽しみにしております。先生方、ぜひ宜しくお願いします。

さて、シンポジウムを始めるにあたり、本イベントの構成をお伝えさせて頂きます。本日は、10分ほどの休憩を挟んで、２部構成のシンポジウムとなります。

第1部は、田窪先生の「黄金の林檎」の制作過程を映した映像を見ながら、作品について先生ご本人から語って頂きます。

その後、高階秀爾先生より、絵画史を振り返り、リンゴを描いた作品についてのご説明を通して、田窪先生の作品、特に「黄金の林檎」について語って頂きます。

第2部ですが、第1部終了後、10分の休憩を挟みまして、パネル形式で田窪先生に再び登壇いただき、本学の教育学科教員である水島尚喜教授と共に、ならびに私、永田がモデレータとして作品のテーマである「共生」のための教育とは何かなど、共生という理念のみならず、実践的な話題を中心にお話をさせていただきます。どうぞ宜しくお願いします。

さて、それでは、さっそく第1部に参りたいと思います。

目次

はしがき i
ごあいさつ（岡崎淑子） iii
本シンポジウムの趣旨（永田佳之） iv

第 1 部
「黄金の林檎」が完成に至るまで（田窪恭治） 3
リンゴをめぐる文化論（高階秀爾） 9

第 2 部
子どもが描く「リンゴ」の意味（水島尚喜） 23
「黄金の林檎」とこれからの教育（田窪恭治・永田佳之・水島尚喜） 33

むすびの言葉（大橋正明） 41

<第 1 部>

「黄金の林檎」が完成に至るまで
（田窪恭治氏による講演）

リンゴをめぐる文化論
（高階秀爾氏による講演）

「黄金の林檎」が完成に至るまで

（講演*）

田窪恭治

どうも皆さん、こんにちは。（拍手）聖心女子大学の新しい教育の拠点である 4 号館グローバルプラザの 1 階で「黄金の林檎」をご覧いただいたと思いますが、ちょうど去年の 6 月に聖心女子大学から、作品の依頼がありました。新しくグローバル共生研究所が出来るということで私なりに「共生」ということをテーマにいろいろ考えながら下絵を繰り返していたのですが、なかなか上手くいかない。やはり頭で考えていると面白くない。

そこで私がこれまでやって来たことを思案していると、8 月の終わりぐらいでしょうか。あるとき、ふっと「黄金の林檎」のイメージが頭の中に湧いてきたのです。

それから私にはもうひとつやりたかったことがあり、イタリアのラヴェンナという　ビザンチンモザイク壁画のサンタポリナーレ・イン・クラッセ聖堂で見たモザイクの作品が忘れられなくて、いつか機会があればモザイク壁画を作りたいなと思っていたのです。

モザイクは、私はできれば自然石、世界中の自然の石。石というのは人間の歴史を超えて数億年という歴史を持っている世界であります。それでその石を割ると今まで見たことのないような世界が現れるのですね。そういう、人間というよりはむしろ地球の記憶をこのグローバルプラザの 1 階の壁面に、いろいろな時間の層を隣り合わせながら作品をつくることが「共生」につながるのかなという気がしたのです。

しかし皆さんの中には、「この場所になぜ林檎なのか。それも、この世の中に存在しない黄金の林檎なのか」という疑問を持たれていると思いますが、その辺は私の後に講演していただく高階秀爾先生からお話しいただけると思いますのでご聴講ください。私自身、非常に興味を持っているのですが、「リンゴをめぐる文化論」。これを聞き逃したら大変だなというか…。私のこの「黄金の林檎」の作品とも関係してくるので高階先生のご講演を皆さん、期待していただきたいと思います。

今日も映像の作業していただいている尾高俊夫さんは、私の 40 年間の作品をつくる過程をノルマンディーであったり、ロンドンであったり、高知や広尾、いろいろな所まで来てくれて撮り続けてくれていいます。これから、私の「黄金の林檎」の制作過程を撮り続けた尾高さんの映像を見ながら説明していきたいと思います。

＊「黄金の林檎」の制作過程を映したビデオを観ながらの作品解説

9月からまず描き始めたのですが、現場は高さがうんとあるので、この1メートル69センチの小さな人間なので届かないのですね。なので、いつもは釣りざおの先に木炭とかパステルとかを付けて描くのですが、今回は、もっと背が高い所まで届く高所作業車を借りてその上から描いていくために2日間、教習所に通いました。私はいわゆるアトリエで絵を描くのではなくそれぞれの制作現場で描くタイプの作家ですが、このようなスタイルになったきっかけは、

先ほど学長さんからも説明していただきましたが、私は30代終わりにフランスのノルマンディーに 15 世紀末に造られて壊れかけていた礼拝堂がありまして、それを作品化するために家族を連れて現地に住みました。結果的に11年ですが、子どもたちも現地の小学校・中学校と高校、長男は大学も卒業したわけです。その場所に住んで作品をつくるというスタイルが、そのころから私の作品の制作のスタイルになったわけですね。

再生後礼拝堂内部

随分前の話ですが NHK のテレビでも紹介されたので、その映像を見ていただいた方もいらっしゃると思います。その後、日本に帰ってきまして、また私の高校時代を過ごした香川県の金刀比羅宮を対象とした「琴平山再生計画」という仕事を現地に移り住み、11年かけて実施しました。そして一番新しい仕事が、この「黄金の林檎」をテーマとしたモザイク壁画です。

これが描き始めたころです。9月中旬ぐらいですかね。最初、釣竿の先に木炭をつけて線を描いています。それからど真ん中の林檎に、ゴールドを付けています。大体、私は発色のきれいなものが好きなので、オイルパステルという子どもの描くクレヨンのようなものを使って、今、仕事をすることが多いのです。これはコンテかな？　金の種類の中でも、山吹色からシルバーに近い色まで5、6種類ぐらいあって「黄金の林檎」のディテールをいろいろ取り替えながら描いています。

これはある程度林檎のイメージができてきつつある頃です。このぐらい描ければ完成がだいぶ見えてきていますが、その前にある程度、最初に何本か線を描いたとき

に、もう完成しているなという感じがしています。それから、だんだんバランスを取りながらずっと進めていくのですが、進めていきながら何となく私自身の「魂」というか、むしろこの場合は「黄金の林檎」の「魂」というのですかね。もう描き始めたらそこに生命が宿るような気が私はしていますので、今までなかった真っ白な空間の中に、この林檎の「魂」を植え付けようとして格闘をしています。

これはメバルを釣る竿ですがこの竿が一番シンプルで私は随分と絵筆代わりに使っています。これは最初に木炭とかで描いたり消したりしていますね。

この学校の方で、ずっとこの作業を見てくれた方が「線にはいろいろな音がある」と言ってくれました。迷いなくしゃきしゃきと描いていく線の音。それから、もたもたしながら悩んでいる線の音。私は初めて自分が絵を描いていて線に音があるというのは気付かされました。それからまたその方が「色に温度を感じる」と。色に温度が、温かい、冷たい。そういうものをその方は感じてくれたようなのです。3 ヵ月間描いていましたので現場に見にくれた人も多かったです。

どこで手をやめても完成しているのですが、これで完成というのは最後に手を離すときに作品は完成ということになります。何か描きながら「魂」を探る、そういうようなことを 3 ヵ月ほど続けました。

今回、この原画を見せることができないので残念ですが、マティスのバーンズ財団に描いた「ダンス」の習作が何年か経って出てきたように、出てくることがあるかもしれません、と。それは半分冗談ですが。レオナルド・ダ・ヴィンチは芸術のことについて、「精神のものである」と言っていますが、やはり私は林檎の「魂」のようなものを何にもない空間に生け捕りにしていくとか、創り上げていく。そんなことができればいいなと思って格闘した、3 ヵ月でした。

これは高所作業車にカメラをくくり付けて私の体と一緒に動いて撮っている映像です。

それでこれは何をしているところかと言うと、もう 10 年までいかないかな。6～7 年前から私と新日鐵住金と共同で建築素材の 1 つであるコルクという鋳鉄を開発しました。

‘CORQ®’と書くのですが、それは新日鐵住金のコルテン鋼という特殊な鉄で、橋とか船、タンカーなんかに使う表面が錆びたら、その錆が錆を防いで中が全然腐食しないという鉄です。その鉄を早い時期から彫刻家とか、今でも建築家の人たちも使っているのですが、原型は自然石を割った御影石だったのですが、割った型を取って鋳物として流し込んで作ってこのように 5 種類あって、その 1 つひとつの鉄のブロックがいろいろな場所に応じて姿を変えていく。

私はこの CORQ®を使った作品に関して「感覚細胞」という名称を使っています。これからが大事ですが、モザイク。今日お見えになっている上哲夫さんにこのモザイクに関わっていただきました。日本でトップの方です。建築家の塚本章二さんからご紹介していただきました。彼に出会わなかったら多分、私のこの作品は成功しなかったのではないかと思います。

今、実際に割っていますが、この自然石を割りながらイメージを整えて作っていくところです。先ほども言いましたように、何億も昔から眠っているような記憶をこのハンマーひと振りで呼び覚ましていく。それ自体とてもスリリングなことだと思いますが、それを形にしていく。

ちょうど左に私が描いた絵があり、それを見ながら床でパネルを 3 分割にして乗せていく。だんだん大きい石から小さい石、これは全部自然石です。上さんたちに聞いた話によると、一番濃いグリーンが日本の古代青と言ったかな。青葉と言ったかな。そういう名前の石です。それからもう少し薄いグリーンが、中国の雲崗。それから真っ白い中でも、ギリシャのタソス島というそこで取れた白い石。それからイタリアのカッラーラという所で取れたグレーの石です。林檎の輪郭を取っている黒い石はアフリカのジンバブエとか、とにかく世界中の石がここで共存してくるわけです。金色に光っているのは御影石の表面を磨いたところに金箔を貼っています。やはり山吹からシルバーに近いような、4 段階か 5 段階の金箔を使って貼り分けています。

これは相当寒い時期、去年の 12 月から今年の 2 月いっぱいですね。上さんをはじめ、モザイクアーティストの方々が多いときは 10 人以上結集して制作してくれました。こういうのはやはり、聖心女子大学の新しいグローバル共生研究所のスタートにとって本当に良かった。

これが今日、皆さんが見てくれた空間です。先ほどのCORQ®という鉄を床に敷いてあります。

まだ歩いていない方はぜひこの上を歩いてほしいのですが、カチャカチャという音がして本当にタップダンスでも誰かやってもらいたいなという気がします。僕は先ほどの線の音とか色の温かみとか、作品を見た方からの話に非常に感動を受けました。音も 1 つ、やはり大事な要素だなと感じました。

これは表面を磨いている所と、割り肌のままの所もありますので、自分の顔が映ったり、それから金箔も色の違う金箔を貼っていますので、1 日のうちでも、太陽の当たり方で色や見え方も違ってきます。また厚みも、3センチとか3センチ5ミリぐらいの厚さのものから7ミリぐらいの物もあり、かなりでこぼこしています。なので、見方によって感じが違って見えると思います。

グローバルプラザの1階から2階には階段で上がれますので、今日お帰りの前に2階から見ていない方はぜひ見ていただきたいと思います。

最後にこの会場にいらっしゃる上さん、それからお仲間の皆さんに盛大な拍手をお願いしたいと思います。（拍手）

どうもありがとうございました。僕からは制作の過程を説明させていただきました。あとは高階先生のお話でございます。耳を傾けていただきたいと思います。失礼します。（拍手）

リンゴをめぐる文化論

大原美術館館長
高階秀爾

皆さん、こんばんは。ただ今、ご紹介いただきました高階です。今、田窪さんの「黄金の林檎」のお話を伺いました。今日は西洋を中心にそのリンゴを巡る文化論のお話をしますが、もちろん自然との共生や日本についてもお話します。

それでは、世界を変えた 3 つのリンゴというお話をします。いちばん最初のリンゴはアダムのリンゴです。このストーリーは皆さんご存知だと思います。聖書の中に出てきます。これは世界どころか、人間の歴史を変えた。アダムとエバが、エデンの園という楽園にいた。この絵は楽園の情景ですが、その楽園では木々には実がなり、何でも自由に食べていい。ところが神様の命令で、1 つだけ絶対に手を入れてはいけないという木があった。それが禁断の果実の木です。それがあるとき悪魔がいて、エバを誘惑して、「この木の実は大変おいしいし、知恵が付くのだ」ということでエバを誘惑する。ついにエバがその実を取って食べて、それからアダムに食べさせる。これは神様が「食べてはいけない」ということを言ったのに、言い付けに背いたわけですね。背いたので、それがすぐにばれて追放されます。結局、そのリンゴを食べたがために、人間は楽園から追放されて地上で苦労する。人間の歴史の中で大きな節目になるわけです。それが最初のリンゴです。

ただ、旧約聖書に出てくるお話を見ると、リンゴとはどこにも書かれていないのです。

これは善悪を知る木、つまり知恵の木です。これは、15 世紀の初め、フランドルからやってきた画家、これはランブール兄弟という大変に優れた画家が描いた聖書の本の挿絵です。いろいろな挿絵があります。これがエデンの園で、これがその知恵の木。ここに変な顔の、下のほうがヘビになっている悪魔がいて、エバにリンゴ（木の実）を渡しています。それをエバがもらって食べた。そして、アダムにも食べさせた。聖書には善悪を知る、リンゴとは書いていないのですが、いつの間にかそれがリンゴということになってしまったのです。これはかなり後の話です。

それで英語のアダムのリンゴ、“The Adam's apple”というのは、男の人は喉仏が出ていて、あれを今でもアダムのリンゴと言います。アダムが食べたときに神様はすぐ分かった。それで神様は、「アダムはいるか」と尋ね、アダムは慌てて飲み込んで、その種が喉に引っ掛かったという話になってしまった。後で田窪さんの「黄金の林檎」に種があるかどうかという話があると思いますが、アダムのリンゴには種があった。それがいまだに引っ掛かっているから、男性は喉仏が出ている。女性はないのだという後にできた話です。実はその旧約聖書の話がリンゴになったのは 13 世紀の話で、次に出てくる黄金のリンゴと関係があるのですが、一般にはこれがリンゴであるとされた。ここにもリンゴの絵が描いてあります。ということで神様は、2 人を怒っているわけです。そして、ここから追放されます。これはエバが誘惑されて、食べて、神様に怒られて楽園追放という刑、これを一つに描いてしまったのですね。そしてこれから 2 人、つまり、われわれ人類は大変苦しい生活をする。楽園は離れてしまう。これが第 1 のリンゴ。人間の運命が大きく変わったわけです。

このテーマは、美術ではよく描かれました。例えば 15 世紀フランドルのフーゴー・ファン・デル・グースの絵は、非常に先の絵と似ていますよね。木があってこれが悪魔、下はヘビになっています。この木があって、リンゴを言われたとおりに取って、ここでも 1 つ取る。そして、ここにアダムがいるという構図。このアダムとエバがリンゴを食べるというポーズはよくあります。特に知られているのはデューラー。優れた画家です。ドイツのルネサンスの最大の画家と言ってもいいと思います。

アダムとエバが、こちらがエバ、こちらがアダムです。裸体表現としても大変見事な表現だと思いますが、このエバのほうを見てみると、ここに悪魔がいると思います。悪魔がヘビになって、リンゴをエバに渡している。そのためにエバはこのリンゴをもらって、ここにもある。それでアダムにも渡すわけです。従って、このアダムとエバはリンゴを持った、つまり最初の罪を犯した者として、ここにもリンゴが登場している。

それからイタリアでは、これはヴェネツィアのティントレットの絵です。16 世紀の大変優れた画家ですが、ここではまさにリンゴを食べているところが描かれている。ここに知恵の木があって、エバがいて、ここにリンゴを持っている。もうエバは食べてしまったのでしょうね。それでアダムに差し出している。

アダムは神様に言われて、いけないと思ったが、何となくエバに言われて、どうしようと言いながら結局食べてしまうという場面です。この表現としては裸体表現、前向きと後ろ向きの男女の見事な表現になっています。そして遠くに 2 人は追われて逃げていくわけです。神様に見つかる。結局、この楽園から 2 人は追放される。ですから誘惑して食べた場面と、逃げていく場面を一緒に描いてしまっているわけです。こういう種類の絵が、ミケランジェロの天井画とか、19 世紀になって数多くあります。それだけで 1 回分の授業になります。それは飛ばしますけれども、という形で最初のリンゴはこのアダムのリンゴであります。

2 番目、世界で第 2 のリンゴの話をします。これが黄金のリンゴなのです。まさにこれは黄金のリンゴです。それは何かと言うと、これも皆さんご存知だと思います。パリスの審判という話があります。これは聖書ではなくてギリシャ神話です。ギリシャ神話で、ある結婚式がある。結婚式があってお祝い、ギリシャの場合には神様がいっぱいいます。ゼウスだとか、ヘラだとか、アフロディテとか。結婚のお祝いだから、そのお祝いというので神様も呼んだのですね。大いににぎやかにお祝いをした。ところが、一人だけ呼ばれなか

った神様がいます。それは不和の神、不和というのは仲たがいの神、つまりけんかする神様。ギリシャは面白いので仲たがいの神様、日本でも神様というのはいろいろいて、貧乏神とかかまどの神とかいる。ギリシャには不和の神、エリスがいた。これは結婚式にはどうも具合が悪いというので呼ばれなかったのです。それを聞いて不和の神、女神は怒った。呼ばないとはけしからん。そこで結婚式をめちゃくちゃにしてやるというので、どうしたか。そこでリンゴなのです。

黄金のリンゴを 1 つ、結婚式場に投げ込みました。その黄金のリンゴというのが、実はギリシャ神話で言うと神々の女王、神々で一番の王様というのはゼウス、これは英語で言うとジュピターですね。ジュピターの奥方のジュノーという、これは神々の女王ですが、ヘスペリデスという所に特別に、他の人は使えない自分だけのリンゴ園を持っていた。そこに黄金のリンゴがあった。つまり、特別のリンゴです。そして、それは黄金のリンゴである。しかし、その特別のリンゴをヘラクレスという英雄が盗んできた。それを不和の女神が使ったのです。このヘスペリデスのなかなか面白い、またお話があって、実は後でも出てきます。田窪さんのお話が「黄金の林檎」、大原美術館で展覧会をやったときは「黄昏の娘たち」という題、ヘスペリデスの娘たちという題で展覧会をやりましたが、それは別として、その黄金のリンゴを不和の女神が結婚式場に投げ込みました。ただし、ただ投げ込んだのではなく、そこに一言、「一番美しい人へ」と書いた。そこが問題なのです。結婚式場でいきなりきれいなリンゴが来た。見れば、「一番美しい人へ」。じゃあ、これは誰の物かというので、「それは私のだ」というのがぞろぞろ出てきてしまったわけです。その中で特に美しい、「私こそ美しい」という、これは女神ですけれども 3 人いました。それがパリスの審判の話です。その黄金のリンゴを巡って、もう結婚式どころではなくなりました。「いや、それは私のだ」と言って大騒ぎになった。

そして「私のだ」と言ったのは先ほど言った神々の女王、ヘラ。これはギリシャではヘラ、英語ではジュノーです。神々の女王のジュノーというのは、同時に結婚の女神でもある。家庭を守る神様ですから。ですから今、英語では 6 月のことをジューンと言いますが、あれはジュノーの月です。結婚はジュノーの月で、ジューンブライドと今でも言います。これが、「私が神々の女王できれいだ。そのリンゴは私の物だ」。

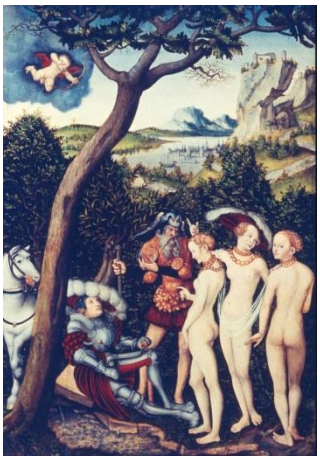
「いや、違う」と言ったのがアフロディテ。これはビーナスです。言うまでもなくアフロディテは愛と美の女神ですから、「私が一番美しいのだ」と言うのです。もう一人、アテネという、これはアテネの町の守護神ですが、同時にこれは学問の神様でもあり、武芸の神様でもある。アテネという、頭もいいし、腕も強いという女神。これもゼウスの娘ですが、その 3 人が「いや、これは私のだ」と主張し、3 人が譲らないものですから大騒ぎになってしまう。

そこで女神たちがジュピターの所に行って、「誰が一番か、そのリンゴを誰の物か決めてください」。そこはジュピターも困ったのでしょう。うっかり決められない。しかし、それは神々の一番の王様ですから決定しなきゃいけない。そういうところはずるいですね。「よし、決めました。誰にというのではなく、それをパリスに決めさせる」と決めたと。人に押し付けたわけです。このパリスというのが、実はトロヤという国の王子様です。そこでゼウスがそう決めたというので、3 人がわざわざトロヤまでというのが、パリスの審判の話です。

これはその審判の場面の一つ。これは行く 15 世紀のウテワールという画家の作品ですが、奥のほうに結婚式のお祝いの場面がある。ここでみんな、お祝いをしている。いろいろ愛の女神が飛んだりして、周りにもいます。ところがそこにリンゴが出てきて、これがパリスです。トロヤまで行って、この部分だけ見てみますと真ん中にいるのがパリスです。そして女神がここに 1 人、それからここに、これはかぶとをかぶってい

るから、これは武芸の女神でアテネでしょう。それからこっち側にいるのが、これがそうするとジュノーということになり、ジュノーがいて、ビーナスがいて、ビーナスはキューピッドと一緒にいる。それからアテネがいる。これでこのパリスが、彼は結局、ビーナスにリンゴを渡しています。彼が見て、「ビーナスがいい」というので渡してしまいました。

そのために、これはビーナス像というのは昔からよく描かれました。ミロのビーナスとか、ルーブルに行っても、どこに行っても、ギリシャ以来ビーナス像はありますが、その後、しばしばリンゴを持ったビーナスという像があります。これは日本にもその複製が幾つか並んでいます。岡山駅前にもありますが、ビーナスが手にリンゴを持っている。これは勝利のビーナスという印で、つまりその勝利というのは、この審判争いで勝ったということなのです。ここでビーナスとキューピッドが一緒になって喜んでいる。このテーマは、よく描かれました。



これはこの間も日本で展覧会がありましたドイツのルーカス・クラナッハという 16 世紀初頭の画家です。ここでは、パリスは何となく中世の騎士のような格好をしています。それで 3 人の女神がいて、パリスは、割に腰を落としたのんびりした格好で審判をしている。これがビーナスでしょうね。このテーマは、美術の上ではよく描かれました。

ルーベンスもこのテーマを幾つも描きました。

これはスペインのマドリッドにありますが、3 人の女神がいて、ここにパリスがいます。これはヘルメスという神々のお使いの神です。ギリシャからうんと離れたトロヤに、ジュピターの命令で 3 人を案内してきたのがマーキュリーですが、リンゴを持ってジュピターの命令を伝えて、そこでパリスが一生懸命、3 人を見ているわけです。この 3 人の中で、キューピッドがいるのは、もちろんビーナスです。それから、ここに盾があります。武具ですね。よろいかぶと、それから盾。これは戦も強いというアテネ。こっちがジュノー。神々の女王ですが、そばにクジャクがいます。これはクジャクをお供にしている。ルーベンスはなかなか画家として裸体表現が巧みですから、非常にうまく正面向き、後ろ向き、横向き、ちょっとひねった女性のさまざまなポーズを描きました。これは絵画表現の上でも非常に面白いです。ここでパリスが一生懸命考える。それで結局、選ぶ。先ほどお話ししたように、ビーナスを選びます。それを描いたのがルーベンスではなくて、ルーベンスの影響を受けたルノワールです。

これは皆さんご存知のルノワールです。この間も展覧会に来ています。パリスがいて、ここではリンゴを、真ん中にいるのがビーナス。これがジュノーで、これがアテネ。これがヘルメス。ここでビーナスがリンゴをもらう。勝利のビーナスになる場面です。ここではリンゴは美のシンボルです。美しさですよ。一番美しい人。それで第1のリンゴ、これは罪のシンボルですね。それを食べて、つまり神様の言い付けに背いた。従って、罪を犯したから人間は追放されてしまう。こっちは美の戦いがある。これが人類の大きな歴史だというのは、実はその争いはビーナスの勝利で終わった。ビーナスはもちろん大喜び。他の 2 人は不満なわけです。それでビーナスはパリスに対してお礼をする。リンゴをくれた勝利にお礼をする。そのお礼は、これはビーナスがそれを言うのですが、「世界で一番美しい女性をあなたのお嫁さんにしてあげる」と言うので、パリスは大喜び。当時、世界で一番美しい女性というのは、ギリシャにいたヘレナという女性です。これは映画にもなりました。「トロイのヘレン」という映画になって有名になります。そのヘレナというのは世界で一番美しい女性で、ビーナスがそれをパリスの奥さんにしようと。

ところが具合の悪いことに、このヘレナは既に人妻でした。ギリシャのメネラウスという人の奥さん。それをビーナスが奪ってきて、パリスに与える。もちろん、ギリシャは怒るわけですね。パリスはトロヤです。トロヤというのはギリシャがあって、地中海の反対側です。ギリシャとトロヤ、メネラウスはそれじゃトロヤへ行って奪い返してくる。つまり美が争いの種になってしまった。

そのトロヤ戦争の話というのはご存知だと思います。ホメロスの『イリアス』という長い詩に長々と書かれています。このギリシャとトロヤは 10 年間にわたって戦争をしたと。これが実は歴史で言うと、今にまでつながっていますが、東地中海のギリシャ、あるいは西洋世界とトロヤ、中東世界との争いなのです。それを反映したのがトロヤ戦争。昔はホメロスのトロヤ戦争の話は単なる物語といった、「いや、実はいろいろとそこに、本当の歴史があるのだ」ということを言って、それを証明したのはシュリーマンというドイツの学者です。実際にトロヤの町を発掘した。発掘したら、ホメロスに出てくるような黄金のマスクだとかさまざまな遺跡が出てきた。トロヤも当時は大変に栄え、一方、ギリシャはもちろん西洋の始まりです。その 2 つが争った。つまり、これは東西の争いです。

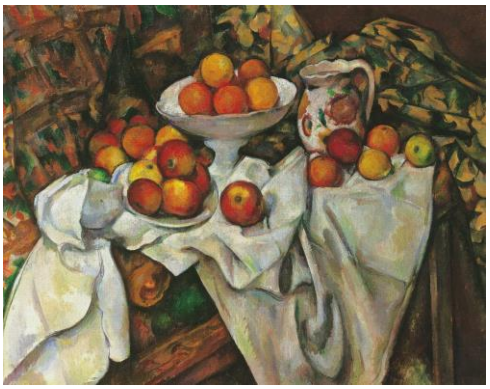
従って、この黄金のリンゴは美のシンボルと同時に、争いのシンボルになります。第 1 のリンゴは罪です。罪の場合は、これは良い、悪いがはっきりしているわけです。アダムとエバが罪を犯してしまった。キリスト教では皆さんご承知のとおり、人間は罪を犯したらよろしくない。善悪がはっきりしています。最後の審判の日には、全員われわれはみんな再びよみがえってしまうわけで、いい人は天国に行くし、悪い人は地獄へ行く。つまり、道徳的な区別がはっきり分かれます。

しかし、この戦争の場合はどっちがいい、悪いじゃないです。どっちが美しいか、どっちが強いか、弱いかということになり、争いの基になります。それはいまだにあの地中海地域を巡ってあるわけですが、その基がこのリンゴでありました。しかもそのトロヤとギリシャの 10 年にわたる争いは、結局、最終的にギリシャが勝ちます。これもお話としては有名な、木馬を使って乗り込んだとかいろいろありますが、省略します。結局、地中海世界をヨーロッパが支配します。いまだに中近東、つまりトルコを含めたイスラム世界で、イスラム世界とヨーロッパ世界とがいろいろと問題を起こすという一番の基であり、人間

の歴史を変えた非常に大きな事件です。それが、この第 2 のリンゴだということになります。

さて、第 3 のリンゴとは何でしょう。それは、ニュートンのリンゴだというのですね。リンゴが落ちるのを見て、万有引力を発見。ですからこれは罪でもない、美でもない、争いでもない。つまり、物としてリンゴを見ているわけです。では、なぜ落ちるのだろう。リンゴも落ちるし、石ころも落ちるし、それをいろいろと考えた。それで、ニュートンがリンゴを見て引力の法則を発見した。

これも本当かどうか分かりませんが、ともかくニュートンはそういう世界の動き、運動、これは物が落ちることから天体の動き、太陽が出るとか、星が回るということまで含めて、物には全て引き合う力があるということ、それをリンゴに託しています。これは科学思想になり、物の本質を探るということです。3 番目のリンゴ以来、西洋は科学を発達させました。科学に基づくテクニックが生まれる。科学文明、物質文明。これは今まで続いている世界がそこに生まれたということになります。そうするとリンゴはどうなったかと言うと、単なる物になってしまったわけです。

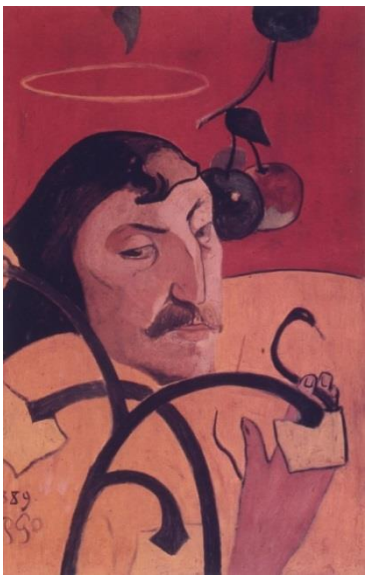


これは有名なセザンヌの絵です。セザンヌは、リンゴをよく描きました。セザンヌは物を、花でも何でも、肖像も描いたし、風景も描きました。セザンヌというのはものすごく時間をかける人です。肖像を描くときも大騒ぎで、モデルは動いちゃいけないと。何十回も黙って長いこと座らす。だから、誰もモデルになりたがらない。ヴォラールという人を描き、賞賛されましたが、長いこと座っているので、ついついうっかり居眠りしたらセザンヌが怒って、「そんなふらふらするな。リンゴみたいにしっかりしていろ」と言われた。ですのでヴォラールの肖像はありますが、普通の人のはなかなかなく、セザンヌの肖像画はおとなしい人のに限られています。自分の奥さんは非常におとなしい人ですから、奥さんの肖像はよく描きました。それから自分の使用人の庭師の肖像画も。

風景はもちろん、時間をかけても、サント・ヴィクトワールとかいろいろと描きました。物は黙っている。ただし、花はあまり描かないです。花はすぐしおれちゃう。リンゴならばいいだろう。つまり、なかなかしおれない。それで物として、時間をかけて描きました。ただし、リンゴも大体、長く置いておくと腐ってくる。セザンヌの南フランスには、今でもアトリエに行くと残っている。造花のリンゴとか、造花、花ですね。花も描くときに、作り物の花ならばいつまでもある。それを描いたりしていると。その代わりに絵としては見事。つまり見事な形、色彩、それを象徴的な意味なしにどうやって形を捉えるかということを描いた。生涯、いろいろとリンゴを描きました。例えば、これもそうです。オルセーにあります。それがテーブルの上にあって、全体の構図の中でどういうふうに輝くかというのが、第 3 の物としてのリンゴ、つまり、近代のリンゴの表現です。

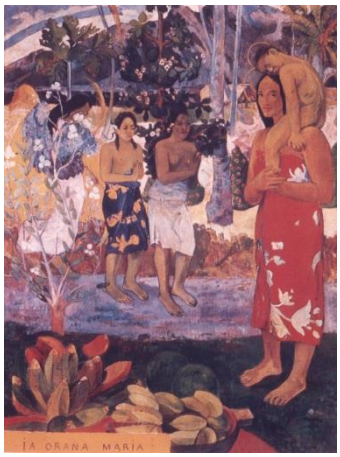
実はこのセザンヌと同じ時代に、象徴主義、シンボリズムですね。人間の心の中、魂の中、精神の世界というものを描き出そうと、文学もいろいろとあります。そういうシンボリズムというのは物を描きますが、その物にいろいろな意味付けがある。それを画家の場

合には、絵画のシンボリズムという言葉で呼んでいます。その基になったのが、例えばゴーギャンです。それからさらにいえば、世紀末の画家たち。今では有名なギュスターヴ・モローだとか、やがてはシュールレアリズムとかにつながるのです。



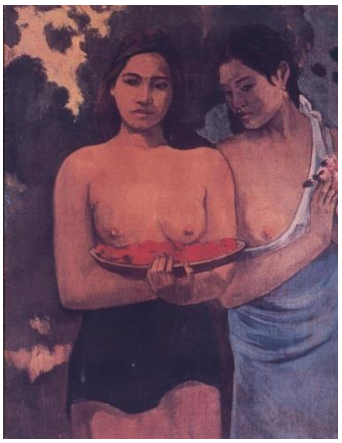
このゴーギャンが描いた自画像ですが、ここにリンゴがあります。これがその昔の、まさにアダムのリンゴ。原罪のリンゴ。そのリンゴは実はここに花がありますが、ゴーギャンの手にヘビがいます。悪魔のヘビが。ゴーギャンは、実はその文明世界、つまり科学で進歩してきた文明世界を嫌って、フランスを離れてタヒチに、つまり原始の生命の世界に移ります。その思想を反映しているのです。元々、下がっていけば、西洋の文明というのはエデンの園まで下がると。そういうものを否定して、その悪魔はここで自分はやっつけると。ここにそのシンボルのリンゴがありますが、それに背いて自分は原初的な生命を求める。それはやっぱりキリスト教の思想で、頭にこれは聖人の印を付けた円光を、図々しくも自分に付けています。これは新しい、自分は魂の世界をつくるというゴーギャンの思想を表しています。

実際にタヒチに行って、その思想を例えばタヒチのマリア、イエスとマリアをタヒチの人が拝みます。聖母像というのはもちろん昔からいっぱいありました。キリスト教では一番大事なマリア様がいて、イエス様がいます。それを、文明世界ではない、一番原始的な、しかし、一番人間的な生活のタヒチの人で描きます。



これは「われ、マリアを崇拝する」という題で、タヒチのマリアとイエスを描いています。面白いのは、そこに天使もいますが、みんなが拝んでいる。前に果物がいっぱいあります。果物というのはリンゴにも関係がありますが、リンゴだけではなく、果物を持つ女性というのを彼はよく描きました。

これもタヒチの女性です。これはタヒチですから、果物でもリンゴじゃなくてマンゴー。マンゴーを持つ女性像。これも非常にたくましい原始的な女性像。リンゴを持っているこの女性像は多少、おなかが大きいのですね。子どもを身ごもっています。マンゴーの実というのは同時に生命を新しく生み出す。



これは花、花を持つ女性を描いている。花を胸の所で抱えています。花は見るからに華やかです。しかしリンゴは実はそこから実ってくる。問題になるのは、アダムの原罪のリンゴも、それからパリスの審判のリンゴも実だけですが、花があって、そして実がなる。ということは当然、木がある。それを、木を付けた、3人の女性でゴーギャンは描きました。

これを見ると、この女性は花輪を持って飾っていますよね。これは一番若い女性。若い女性を花で飾り立てている。しかし、左の女性は籠を持っていて、ここに果物がある。つまり中年ぐらい。一番下の女性は子どもを抱いています。つまり、生命のつながりというものがリンゴに限らず、植物とつながっているということになる。

さて、ここまでは、もっぱら西洋を中心に見ました。次に日本、あるいは東洋の思想、そして田窪恭治も登場してきます。

これは先ほどあった、ノルマンディーにある「林檎の礼拝堂」。フランスの田舎の小さなキリスト教の礼拝堂です。

その中に田窪さんがリンゴを描いた。リンゴの木を描いて、花を描いた。つまり、全体を描いたのです。これがまたぜひ注意しておいていただきたいのですが、西洋のこういう教会堂は完全に外は壁でふさがれて、中に神様がいます。西洋の教会堂はみんなそうです。

パリのノートルダムは有名ですね。この林檎の礼拝堂よりはるかに大きなゴ立派なシックの聖堂ですが、あの中はもちろん神様の場所。しかし外は、ノートルダムの前でも、観光業者がいっぱいいるし、車が通るし、つまり俗世間です。建物だけが神様の場所。外は俗世間。非常にはっきり区別されている。これは林檎の場合も、礼拝堂も小さくてもそうです。それは当然、神にささげるものですから、これだけは特別な場所です。そこに田窪さんは林檎の木を描きました。

本日、実際に実物を見ていただけば分かりますが、やはり黄金の林檎を地面から木としてつくられたわけですよね。

実は数年前に田窪さんの展覧会を私どもの大原美術館で開いたときに、私は林檎の礼拝堂を持っていきたいと思ったのですが、まさかそういうわけにいかない。そこで、展覧会の会場は大原美術館の脇にある有隣荘というお屋敷ですが、そこにふすま絵を描いていただいた。

これがその大原美術館でのふすま絵です。やはり樹木のデッサンです。先ほどのゴーギャンの場合も、リンゴは、あるいは樹木と言ってもいいですが、罪のシンボルであり、美のシンボルであり、争いのシンボルでした。しかし、ここではまず、生命のシンボルなのです。日本はそれを非常に大事にします。それが例えば神殿建築にもあるわけです。

これは伊勢神宮。ご存知のとおり、伊勢神宮というのは木造建築です。これは建築として面白いのは、先ほどの林檎の礼拝堂など、西洋はみんな石です。ノートルダムも石です。しかし、日本は木です。木ですから、これは世界でもちょっと珍しい。かつて、昔は木の建築があちこちにありました。しかし、なかなか残らない。日本はずっと残っていて、正倉院だとか法隆寺だとか。しかも現在まで日本の建築はほとんど全て素材が木なのです。今度の国立競技場、オリンピックのときにいろいろと問題があるようですが、あれも木材を非常によく使うという特色を見せています。伊勢神宮は木を使った最初の建築の代表的なものの１つです。

建物としては素朴です。掘立柱という真っすぐに、直接、地面から生える柱。そこに棟木をわたして屋根をつくったというだけの話です。非常に見事なものです。そして、しかも白木の造り。これは建築的に言うと、ある意味では大変に持ちが悪い。持ちが悪いというのは、掘立柱ですからここが腐りやすい。当時、既に日本では仏教建築が相次ぎました。青丹よし（あおによし）の奈良の都です。仏教建築は必ず礎石というのを置きます。石の上に柱を立てます。それから屋根はかやぶきですが、仏教建築は瓦です。焼いた瓦のほうが持つ。これは頻繁に変えなきゃいけない。当時、日本は既に仏教建築を知っていましたが、神様の住まいとして持ちの悪い木造、掘立柱、かやぶき屋根を使いました。逆にいえば頻繁に直さなきゃいけない。これは 20 年ごとの遷宮の始まりです。天武天皇のときに始

まった。20 年ごとに常に新しくて、ずっと形を伝えていくのです。それは樹木の生命をつなげていくということです。仏教建築でも、西洋の建築でも、造られたものはその時代、時期のものです。

パリのノートルダムは 13 世紀に造られた。だから、「これは 800 年前のだよ」ということを言って、今から 800 年前のそれをずっと続けている。これは、これが外国の人はなかなか分からないのですが、伊勢神宮は日本の建築史では天武天皇のとき、上代建築に出てきますが、いつ建てたかと言うとこれは遷宮、この間の遷宮はつい数年前ですよね。「21 世紀に建てました」と言うと、「これは 21 世紀建築ではないか」と言うのですが、違うのです。常に新しいけれども、古いのです。これが伊勢の持っている非常に大きな意味です。

これは空中写真ですが、これがこの前の遷宮のときに撮った写真です。本殿、正殿があって、玉垣やなんかがあります。これが次の遷宮のときには、そっくりこっちに建て替えるわけです。それでここを空き地にして、20 年後にはここにまた戻るというそれを繰り返すために、常に現在であって古いものがつながる。しかも大事なのは、先ほど述べたノートルダムで建物が神様の場所と言いました。伊勢神宮はもちろん神様の場所なのですが、周りも全部そうです。これが神域です。神の域なので、「五十鈴（いすず）の森」にはわれわれは勝手に入れないのです。伊勢神宮に行くときには、まず五十鈴川の鳥居をくぐります。鳥居をくぐって、途端に神様の場所になる。日本の神社というのはみんなそうです。

かつて 1878 年にイギリスのイザベラ・バードという人が、日本に来て、旅行をしたことがあります。そのバードさんはもうお年で、かなり体が弱かった。弱かったからあちこち、体を鍛えるために旅行をして歩く。ついでに日本にまで来て、そして女性の身で 3 ヵ月にわたって東北・北海道を回りました。1878 年、明治 11 年ですよ。明治 11 年というのはつい御一新、まだ文明開化の初めのころで、日本はめちゃくちゃの時代です。まだ古いものばかり。それも東北・北海道まで一人で旅をしたという大変勇敢な女性でして、そのバードの旅行記が「日本奥地紀行」といういい本なのです。今、翻訳が東洋文庫に収まっています。それを見ると、バードさんは珍しい日本の風景について書いているのですが、1 つ、引用します。「日本の特に東北地方を見ていると、所々に不思議な林というか、小さな森がある」と。「それは何だととにかく行ってみる。そうすると必ず鳥居がある。鳥居があって、小さいですが入っていくと傾斜があって、上のほうに何かありそう。行ってみると大したことはない。壊れかかった建物があるか、あるいはしばしば何もない。しかし、それは土地の人がよく行って拝む・・・」。

これは、我々にはよく分かりますよね。今も残っている、つまり鎮守のお社です。明治期は、あちこちに残っていました。今でも残っています。新幹線でずっと、私はよく秋田に行くときに新幹線で通ると、沿線は建物がいっぱいです。日本は狭い国だから、民家だとか工場だとかずっと建物、あるいは田んぼが続きます。その中に時々、こんもりとした緑の茂みがある。これが鎮守の森と呼ばれる、村の守り神、神様のいる所。実はこれはいまだに多く残っています。鎮守の森を研究している人がいて、日本にはざっと 10 万ヵ所あるそうです。一番大きいのは、東京という大都会、1,300 万人もいる世界有数の現代都会の真ん中にある皇居です。

皇居は完全に自然の世界です。皇居の中には、今でもそうですが、電車や自動車は入れない。自然のままの自然相が残っています。皇居の中にある草花、草木類の種類はほとんど全て、ヨーロッパにあるものは全部あります。プラス数百種あるそうです。日本全体でも、植物や動物の数は多い。その鎮守の森、一番大きいのは言うまでもなくこれです。伊

勢神宮についても調べた人がいます。伊勢神宮の周りの五十鈴の森の中に昆虫の種類が2,600以上の種類があるそうです。いまだにそれがみんな一緒にいる、と。そして伊勢のみならず、小さい所でも鎮守の森がある。そこでは、ごく限られた村人たちがお祭りもする。そして、普段から伐採禁止、木を切っちゃいけない。殺生禁止、捕らえてはいけないということは、もう全てに通じています。

鎮守の森という神様にささげられたそのわずかな小さい空間、あるいは大きいものは大きいです。森の中にいるものは大事な生き物。奈良に行かれると奈良の鹿。これは春日神社のお使いということになる。奈良の鹿はよく出てきますが、大事なものには人は手を触れてはいけないし、うっかり殺したら大変なことになる。昔から奈良の鹿だとか、それから三輪山のヘビだとか、あるいはお稲荷、稲荷神社の狐とか、みんな神様の大事なもの。傷付けても、殺してもいけない。動物も、それから植物、昆虫も、全部一緒になっている。それがこの鎮守の森であり、日本の神様の森です。これは同時に宗教的なものと絡み合って、それこそが神の世界なのです。これは西洋の天地創造をする神様と全く別。一緒になって、人間ももちろんその一部です。

これだけ現代科学、物質文明の時代でありながら、東京の街を歩いていると、お稲荷さんがあったり、あるいは小さい神社や鳥居があったりします。われわれはそれに一歩、中に入ると別の世界の意識がはっきりあります。鳥居というのは不思議なもので、実は起源も、一体どこから来たのかよく分からない。他にはないものなのです。しかし、それは神様の世界とつながると同時に、自然の世界につながる。都会の真ん中でもそれがあると別世界になります。そういう自然と一緒になった世界が、現在のわれわれにも生きています。これから皆さんとの、自然との共生研究所でそういうことをお調べいただきたいと思います。

さまざまな動物、植物、人間、そしてさらには自然が 1 つになっている環境ですが、実際には、日本でも環境破壊がどんどん進んでいます。それで困ることももちろんある。同時に、例えば伊勢は手付かずに残っています。鎮守の森も手付かずに残しています。それは非常に大事な遺産だろうと思います。それはどういう形でなされてきたのかということを、これからも私も調べていきたいです。それは、文化の現れである美術にも表わされています。ここの田窪さんの「黄金の林檎」はその意味で非常に優れた文化イベントであったと思います。

どうも、ご清聴ありがとうございました。(拍手)

<第 2 部>

子どもが描く「リンゴ」の意味
（水島尚喜氏による講演）

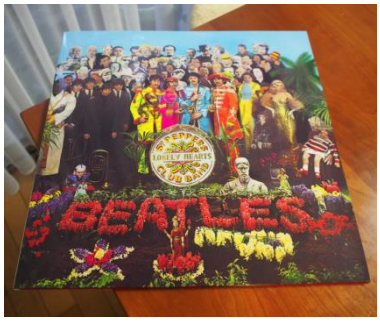
「黄金の林檎」とこれからの教育
（田窪恭治氏、永田佳之氏、水島尚喜氏による鼎談）

子どもが描く「リンゴ」の意味

永田：それでは時間になりましたので、そろそろ後半の第 2 部を始めさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。
後半は先ほど申し上げたように、作家・アーティストである田窪恭治先生ご自身が、どういう思いを込めてあの大作「黄金の林檎」を創られたのかというところに焦点を当てていきたいと思います。そして、共生というのはとかく理念・理想として語られるのが常ですが、それを実現するためには、どのような教育があり得るのかということを、これからの大学の教育を意識しながら皆さんと考えていきたい。そのような時間にできればと考えております。1 時間弱になりますが、どうぞお付き合いください。
まずトップバッターですが、本学教育学科の教員であります水島尚喜教授から田窪先生、そして高階先生のご発表を踏まえて、はじめにプレゼンをさせていただきます。では水島先生、よろしくお願いします。（拍手）

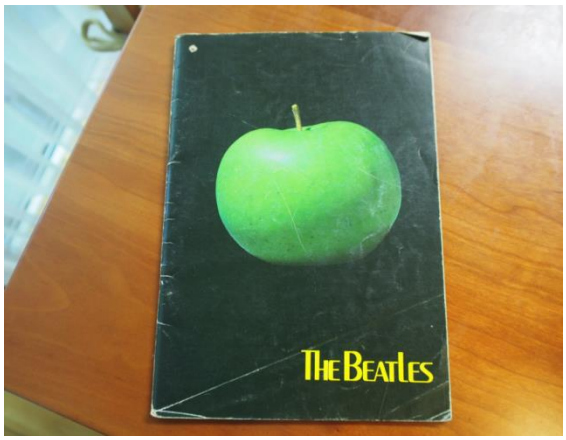
水島：本学の水島と申します。どうぞよろしくお願い致します。
もう 3 日ぐらい前から眠れなくてですね（笑）。と言いますのは、個人史を述べさせていただくことをご容赦ください。私の高校時代、国語の教科書に高階先生の文章が出てまいりまして、そこで美術というのは「美しい言葉で語り得るものなのである」と教えていただきました。美術と言語は無縁と思っていただけに、そのことに非常に衝撃を受けました。それ以来『美術手帖』とか、特に大学時代によく読んでいたのですが、そこに田窪先生の素晴らしく格好いいお姿が出ていて、美術というのは、何て格好いい人たちがやっているのだろうと…言葉の世界で、美術の世界で、憧れのスーパースターのお二人が、前段でお話しいただいておりまして、私のような者がこの場にいるのが本当に不思議な感じが致している次第です。
私は美術教育という学問領域に生きている人間ですから、子どもを語るということしかできない人間です。田窪先生から「水島さん、好きなように語っていいよ」とおっしゃっていただきましたので、子どもを通して「美術」そして「共生」という問題をどのように引き受けていけばよいのだろうか、を考えてみようと思います。

スライドに本日の命題的なものが示されております。「子どもたちは共生的感性に生きる存在です。」このことは逆説的にいえば、われわれ大人が失ってしまったもの、過去には持っていたが、なくしてしまったものがあるのではないか。子どもたちを通して、逆にわれわれ大人が教えてもらえるものがある、という視点から考えたいと思います。



そこでまた個人史が続きます（笑）。今年はビートルズの「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」が発表されてから 50 周年ということで、なかなかにぎわっているようです。ビートルズは様々なレベルで文化史の中に足跡を残しました。それ以前でいえば、コンポーザーがいて、作詞家がいて、そしてパフォーマーやシ

ンガーがいるというような、分業的な音楽業界の形態がありました。サージェント・ペパーズは、世界初のコンセプト・アルバムと言われています。1つのコンセプト、物語を起点に、ビジュアルや音楽をトータルにまとめていく。そこにファッションなどの社会現象もひっくるめながら展開するという新たな方向性を示しました。



このスライドは、中学1年のとき、サージェント・ペパーズを買った際に、近所のレコード屋さんでもらったビートルズの冊子です。ディスコグラフィになっていまして、これを日がな眺めては「次はこのアルバムを買いたいな」ということを思っていました。そして、ビートルズと言うと、やはりこの表紙の青リンゴ。一説によると、ジョージ・ハリスンが青リンゴが大好きだったという話もありますし、何よりもジョン・レノンはアート・カレッジの出身でありましたので、そういった影響もあるのではないかと思います。1つのオブジェクトを通して、音楽だけはでないトータルな世界がシンボライズされる現象が起きていたわけです。

それから、「レッド・イット・ビー」のアルバムです。従来はレコードの真ん中のラベルには、タイトルやロゴがあっただけのものが多かったです。そこにビートルズは、青リンゴを持ってきてしまったのですね。

1970年前後にビートルズは、解散するわけですが、ジョンのそのときのアルバムです。ソロとして出したもので、白いリンゴになっています。これには、いろいろなジョン・レノンの思いが感じられます。ビートルズのレコード中央のラベルのリンゴは、赤のときもありましたが、主にヨーロッパで一般的な青リンゴを使用していました。ジョンはそのビートルズを旅立つ。そして、この白のリンゴに思いを表現したのだと思います。

そして今、われわれはコンピューター文明の中に生きていて、このロゴ1つを見るだけで象徴するものを直感するわけです。創業時のアップルにはジョブスとウォズニアックという盟友がいたわけですが、特にジョブスはビートルズのファンでした。特にジョンの大ファンでした。ゆえにこのロゴがあるわけです。長らくイギリス・アップルと、アメリカのアップルコンピューターは折衝をしていて、iTunesへ「ビートルズの楽曲を提供してくれない？」といったやり取りがあったようです。いずれにせよ、このリンゴがただのリンゴではなくて、かじら

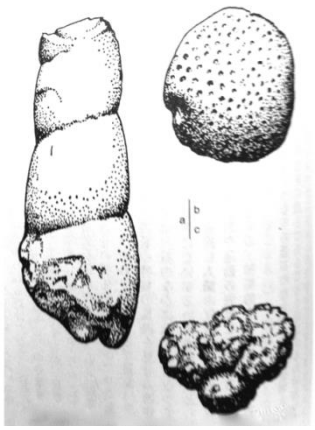
れたリンゴですね。ここにダブルミーニング、トリプルミーニングを、ジョブスという現代の巨人が象徴させたのだと思います。こういった象徴機能によって、先ほどの高階先生のお話にもありましたように、リンゴから旧約聖書の歴史性とか、さまざまな文化的背景というのを直感したり、読み取ったりということを現代の我々も行っています。

ここで少し人類史を紐解いてみましょう。旧人のネアンデルタール人は、絵画というシンボルの使用はなかったのではないかと言われています。これは一般的な学説で、現在では、旧人・新人の範疇分けが非常に微妙なようです。ともかく前後はあっただろうと思いますが、新人のクロマニョン人は、多くの洞窟壁画を残しました。これはアルタミラで、今から１万数千年前になります。これを見ますとお分かりいただけるように、洞窟内部ですから真っ平の壁面ではないわけです。そこに膨らんだ状態の壁面や割れ目等があって、恐らくその太古の人たちは、そこに象徴された何ものかを読み取った。要するに食したであろうバイソンや鹿などのフィジカルな肉体というものを感知したのではないか。非常になまめかしい感じが致します。

そして、これは有名なラスコー壁画です。これは約２万年ぐらい前で、さらにアルタミラから １ 万年ぐらいさかのぼります。既に象徴としての大胆な線の使用が認められます。この線というのは、われわれ人類が新人になって獲得した、言ってみれば脳の機能なわけです。いわゆる感覚情報の中にそこに特徴的なものを読み取りながら表現していくということが行われています。

先日、田窪先生とこの絵のお話をして驚いたのですが、これはショーヴェ洞窟の壁画でフランスの辺境にあります。スライドには、ネコ科の動物というふうに書いてありますが、これは恐らくピューマであろうと。ピューマですから、恐らくこれは食の対象にはならなかったものですね。このピューマの素早い動き、恐らく人間も時には襲われたのでしょう。そういった一瞬の動きを、この線の描写の中で表しています。動きへの感受性が、生き死にを分けていたとも言えます。現在、アニメーションが非常に興隆しているわけですが、アニメーションは当時、当然なかったわけです。でも、物体の動きを分析的に示そうとするアプローチは、とても近似していま

す。これらは、新人のクロマニョン人によって描かれたものですから、われわれと同じ脳の使い方をしていたわけです。こういう非常に巧みな表現を、既に 3 万年以上前に人類は獲得していました。



ムステリアン人によって蒐集された不思議な自然物

a)腹足類の鋳型
b)球状ポリプ群体
c)黄鉄鉱塊

『身ぶりと言葉』
第14章　形の言語　より

ここで、「美の起源は？」ということに進めてみたいと思います。これはアンドレ＝ルロワ＝グーランの「身ぶりと言葉」という代表的な著作からの１ページです。旧人に相当するムステリアン人の遺物が示されています。何に使われたか分からない特定の機能を持たないオブジェです。左の図は、巻貝の化石状の物体です。右上のは恐らくサンゴのような物だと思いますが、「球状ポリプ群体」書いてあります。この著作は、1960 年ぐらいの出版で、図版は白黒です。右下のスケッチは、いわゆる黄鉄鉱なので、これは実際には金のようにピカピカ光るものです。「黄金の林檎」のように見えていたのではないでしょうか。既にこの時代の人たちは、美的な物、要するに「役に立たない」、だけど「形が面白い」、「手触りがよい」、「美しい輝きだ」という感覚をもちあわせていた、と推測します。存在する物自体の美的価値を見出していた。

時代が進みます。私は昨年、イタリアのボローニャ大学で客員させていただいたのですが、これはそのボローニャにある聖堂です。画家モランディが、こよなく愛したサント・ステファノ聖堂で、時代の異なる七つの聖堂によって構成されています。

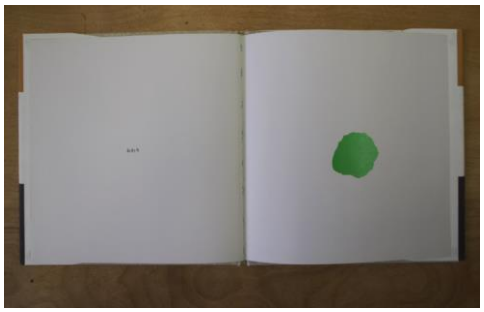
そこには、小規模なモザイク画があります。面白いことに、元々、ボローニャというのは大理石の産地ではありませんので、大理石は出ないのです。でも、ローマ人たちが造った住居が異民族によって破壊された時の瓦礫があった。それを 11 世紀ぐらいになって、ベネディクト派の修道僧さんたちが一生懸命集めて造ったものなのです。ただし、先ほど田窪先生のお話にもありましたが、いわゆるビザンティンのような荘厳なモザイクではない。整合性のある幾何学的な内容ではない。ご覧になると分かりますが、シンメトリーではないですね。

規則性もあることはあるのですが。何よりも言えることは、これは色が美しくていいな、これとこれを組み合わせると綺麗だな、瓦礫の一片一片を一生懸命集めながら何か綺麗な構成物をつくろう、といった楽しい呟きが聞こえてきそうです。野生の思考といいますか、ブリコラージュ的な感性を持った人たちの行いであったのだろうと。それは 11 世紀であろうが、数万年前であろうが、ある意味やっていることはあまり変わりがない。

実は、今日は、子どもの話をしなければいけないのですね（笑）。この絵本『あおくんときいろちゃん』は、広く読み継がれている絵本です。主人公の「あおくんときいろちゃん」は、丸くちぎられた黄色と青の紙で表現されています。そこに目や口が描かれているわけではないのですが、子どもたちはキャラクタライズされたものを読み取って楽しんでいます。作者のレオ＝レオーニは、自宅のアトリエで仕事をしていた時に、足元にあった紙で、自分の息子さんの所に遊びに来た近所の子どもたちにこれを作って見せて大受けだった、そうです。

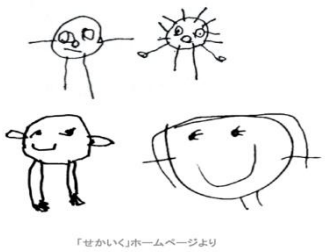
第 1 ページ。「あおくんです。」この絵と一文で、もう子ども達は「あおくん」のお話なんだな、ということを理解します。

左のほうは教室を示しています。右のほうはみんなでわいわいと遊んでいる。いろいろな状況やキャラクター、性格までも、2～3 歳の子ども達は既に色や形から直感しています。



そして、一番代表的なページです。青くんと黄色ちゃんが出逢ったときに一緒になって

緑になっていく。これを見ると子どもたちは、柔和な笑顔になります。子どもたちはこの単なる色と形の混色を、直感的にシンボライズしてとらえます。つまり緑になって、人との融和的な世界が具体化されるということを、象徴化された 1 つの世界として受け入れている。そこに共生的世界を我が身のものとして感じ取っている子どもがいます。


「せかいく」ホームページより

ここからは、子ども自身の表現を見ていきましょう。2、3 歳ぐらいになると、いわゆる「頭足人」というものを子どもたちは描き始めるわけです。丸と直線だけで、色々な人物を表現します。これらは違う子が描いたものだと思いますが、それぞれが非常に個性的でいいですね。そう感じるには、われわれ大人の内なる子どもが共感しているのでしょう。

これは、3 歳の女の子が描いたアニミズム表現です。当然ながら、花には顔はございません。太陽にも顔はございません。でも、この子どもは「お花がわらっているよ」とか、雨が降っていれば「お空が泣いているね」なんていうことを普通に言うわけです。本当にそのように感じている、私たち大人が世界を対象化し、客観的に見ているのとは異なって、我が身のこととして第一人称的に世界を捉えている。私が大好きなそのような表現の中に、男の子が「足がサイダーになっちゃった」。要するにずっと正座してしびれてしまって、「足がサイダーになっちゃった」と表現した。すごいなと思います。表現する語彙が少ないというよりも、実際にそのような感性の中に生きているということではないでしょうか。

これは、当然、お父さんだな（笑）。もう皆さんもお分かりだと思います。しかも眼鏡を、ジョン・レノン眼鏡？をかけているお父さん。何よりも、お父さんのおひげを触るのが面白いのでしょうね。それをちゃんと点々で象徴しています。

これは海外にいる 3 歳児さんの絵ですが、普通の頭足人のように見えます。でも実は面白いことに、彼は車を表現したのだそうです。やはり見ると足が非常に立派ですし、車というものを大人からいえば擬人化していると言えるのでしょうが、要するに一人称化しているのです。私も、車も、お花も、雨が降っている外の様子も、全ての自然世界も、自分のわが身と一緒になっている。全て一人称の世界。ある種、非常に平和といいますか、人間が本来持っていた感覚性に満ち溢れているのだと思います。

人間が本来持っていた感覚性に関連して。これはアルゼンチンにあるカルガス洞窟に残された、いわゆるネガティブハンドといわれる手形です。一説によると成人式の儀式。岩肌に手を押し当てて、口に顔料を含んで、そこでプッと吹きかけます。その手を取った後にこういう形が生まれる。これらの手形は非常によくコンポーズされていて、この壁面全体がそれこそ数千年、1 万年ぐらいの間にわたって、代々の人たちの手がそこにある。すなわち、このような儀式を通して、時間的、空間的な世界の中に、「この私」の位置付を自覚するのでしょう。世界は、私とご先祖様たちと一緒だよ、という共生的な感性に満ち溢れて生きていたのではないでしょうか。世界への帰属意識みたいなものが、この行為の中に表れているような気がします。

そこで、子どもです。これは 2 歳ぐらいの子どもですが、みんな大好きなのです、手形遊びが。絵の具を出しておくと、みんな手にペタペタくっ付けて、フィンガー・ペインティングを自然発生的に行います。そして、自分の身体がそういったことに慣れてくると、やがて自分の脳の内部で、なんらかのイメージを起動させるのだと思います。絵を描き始めるのです。同様の事例が、多くの洞窟絵画の周辺でも見られるそうです。そして、右下には、先生方が形に残るように、転写して写しとってあげています。版画絵として残してあげることによって、子どもたちは、自らの行いの意味や価値を体感できるようになります。フィンガー・ペインティングの教材的価値が、示されていると思います。

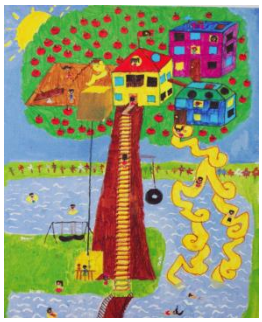
さらに、様々な国や子どもの絵を見ていきたいと思います。それらは、直感的で、技術的には未熟かもしれません。でも子どもの絵の中には神話的世界や人類が築き上げた全ての象徴的意味合いや価値が含まれています。田窪先生のような素晴らしい立派な世界は現出できないかもしれませんが、ある意味、これは田窪先生に失礼な言い方ではなくて、田窪先生のような真にアーティストと同質の内容を実践しているといえます。

これは先ほどの高階先生のお話にも、繋がると思います。蛇が描かれた国内 3 歳児さんの作品です。「ヘビくん、雨はきらいなの？」とタイトルドされています。私はある児童画審査会でこの絵が「いいなあ」と感じ入りました。右側には恐らくサクランボとブドウだと思います。子どもたちはある種の豊穣性とか豊かさみたいなものを、木の実や果物で表現します。それからヘビも、子どもの絵にはとてもよく出てきます。そして自然現象としての雨。自然現象も非常によく描き表します。このような子どもたちの感じている世界が、しっかりとこの絵の中では表現されている。これは 3 歳児さんですが、既に一般的な意味での世界観というものを見いだすことができます。

永田先生とスタディツアーでスリランカを訪れていますが、そのスリランカの 15 歳の、日本でいえば中学校 3 年生の作品です。これも鳥、火、そして太陽があって民族の世界観が、素晴らしい技法で表現されています。と同時に、やはり自然が豊かと言われている国々の子どもたちには、自然への希求とか位置付け方が、バランスよく表されているなあ、という感じがします。

これはタイの 10 歳の子どもです。とてもカラフルです。動物等々、たくさん描かれています。そして、ここにもやはりリンゴのような木が描かれていますね。「命に満ち満ちている」という感じでしょうか。先ほどのゴーギャンの絵に繋がるかもしれません。

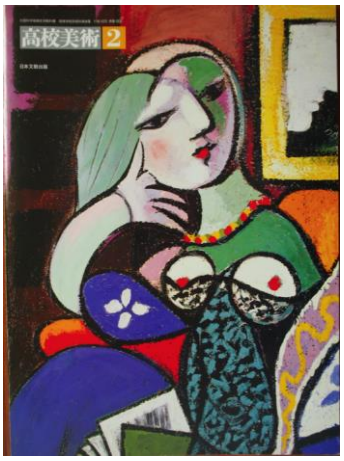
それからこれは日本の子ですが、「ビッグアップル」と書いてあります。大きなリンゴということで、やはりこの子のテーマは、豊穣性でしょう。10 歳ぐらいの子で描き込んでますが、先ほどの 3 歳児さんと同じようにリンゴが持っている豊かさの意味合いを感じます。大きなリンゴを一生懸命に取ろうとしている様子だと思います。良い絵ですね。



また、こんなリンゴの木もあります。世界の豊穣性を、木とその実であるリンゴの関係性でシンボライズしながら、想像性豊かに表現しています。

バングラディシュの 9 歳の女の子によって描かれたものです。1 つの平和的な世界が、まさに世界の調和、共生的世界観といった思想が絵の真ん中に可視化されています。

ただ、礼賛だけでなく、批判的な目もちゃんと子どもは持っています。この子はトルコの男の子。トルコがどんな自然環境の状態にあるか、私は専門じゃないので永田先生、大橋先生に伺わなければいけませんが、タイトルには、「救世主を探す」とあります。10歳前後の子どもたちが、この地球環境への共生的視点や感性を持ちながらそれを絵に表すことができる、未来は捨てたものではないということを、この絵から教えてもらいました。



そして、最後に教育の大切さにつきまして。私はこれまで図工美術教科書の作成に関わってきました。これは平成 14 年の高校２年生の内容です。田窪先生の「林檎の礼拝堂」が取り上げられています。当時の高校生たちは、この題材を基に学習を深めたのですが、色々な美術関係者に出会うと、田窪先生のこの林檎の礼拝堂はとてもインパクトが強かったとおっしゃいます。「この教科書の題材がきっかけで、美術関係の編集をやり始めました」という人もいらっしゃいます。人々と自然、そして歴史性とが交わり、後世に伝えるべき環境作品が生まれた。そこに教育的な関係性が絡みながら、未来への架橋が立体的に現出された。教育的な営為の可能性が示されていると思います。

これは永田先生が中心となって実施された震災後の陸前高田市における松月寺の寺子屋プロジェクトの写真です。私も少しだけ関わらせていただきました。田窪先生と子どもたちはここで一緒に、「夢リンゴの木」を描きました。まずアーティストがその木の幹を描きます。最初の段階で子どもたちは、田窪先生には失礼な言い方ですが、「このおじさんは何だろう？」みたいな感じでいたわけです。ところが先生がクレヨンを持って描き始めた瞬間に、子どもたちはまさにそこに身を重ねて「あっ、すごい！」と直感し、そのリアクションとして自分の思いを身体化しようとしました。今度はリンゴの実を子どもたちが様々な思いを込めて描く番です。

先ほど紹介致しましたベネディクト僧侶の人たちが、モザイク壁画を造る際に「あっ、この色はきれいだな。ここに入れよう」というブリコラージュ的な展開がありました。それは、ここにも見られると思います。子どもたち、1人ひとりは異なった人間ですが、「隣の子がこんな絵を描いたから、私は、こういうのも描こう」と、他の個性を尊重しながら、自分が生きる方策を探る、そういう感覚に満ちていると思います。

子どもたちは、その場にいた人たちの思いを、自分の身の中に取り込んで、さらに創造的に表現していきました。表情にも現れています。これはちなみに永田先生の写真ですが、とても素敵な写真ですね。

向こうに見えるのが広田湾で、太平洋に繋がっています。プロジェクトは、2012 年の 11 月の寒い日でしたが、子どもたちの笑顔と共生的感性に溢れる姿から、この世界というのは、まだまだ大丈夫という、そんな思いを強くしました。

以上です。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

「黄金の林檎」とこれからの教育

永田：水島先生、ありがとうございました。それでは引き続きこのまま、鼎談のほうに移りたいと思います。田窪先生どうぞ、ステージのほうにお上がりください。皆さん、拍手でお迎えください。（拍手）
後半の後半ですが、もう少し共生について焦点化して、いろいろと話をしていきたいと考えております。　実はうちの学生たちはこのモザイク画、「黄金の林檎」のいろいろなうわさを聞いて 4 号館、聖心グローバルプラザに来て見入っていました。それで、「ここに幾つの黄金の林檎があるのだろう？」という話になって、みんな違うことを言うのです。皆さん、林檎がここに幾つ存在するとお考えですか。さっき田窪先生に聞きましたが、ご本人はご存じではなかったようです。ちょっとお聞きします。「まあ、20 個ぐらいだろう」という方は手を挙げてください。おられる？「50 個ぐらいじゃないか」と。はい、8 分の 1 ぐらいですね。「100 個ぐらいじゃないか」という方、どうぞ。多いですね。3 分の 2 ほどです。では 150。何か競りをしているみたいですね（笑）。5 人、6 人、でしょうか？答えは 211 です。一生懸命、朝から大学院生が数えたところ、2 人で写真を撮って数えていたので、211 もたわわに黄金の林檎がなっているということです。
水島先生の話と田窪先生の基調講演、私の中では妙に重なってきました。最後に共生を意識して、高階先生が日本ならではの共生ですよね。「神様の世界に近付いていくと自然と一体化するという、世界でも稀有な在り方なのではないか」というご示唆がありました。一方、水島先生は主に子どもですが、対象と瞬時にして一体化してしまう子どもたち、対象と自分を分けないということを述べておられました。人間は世界と一緒だというふうに、洞窟壁画もそうですよね。同じような例として挙げられていたかと思います。
早速ご質問させていただきたいのですが、溶解体験というのを幼児はいとも簡単にしてしまうけれど大人はなかなかできない。例えばわれわれは、天の川を見ていろいろと星座のことを考えたりしますが、子どもたちは本当にミルキーウェイ、つまり「ミルクの川」として天の川を見るわけですよね。それも溶解体験だと思いますが、それは子どもならではの力なのでしょうか。

水島：恐らく子どもたちは頻繁にそういう溶解を経験していると思います。「溶解」と言ってもお分かりになりますか。溶ける解。こちらの「妖怪」ではございません（笑）。世界とわが身がまさに一体となったような感覚性ということですね。これは別の言い方をすると、複論理的な神話的時間に生きるということにもなると思います。われわれは近代の合理主義の、直線的な時間の世界に生きているわけですが、子どもたちはまさに没頭する中で、対象を溶かし込んでいく中でその世界を様々に生ききっていると言えます。そういった意味からいえば、子どもだけの世界と言いたいところですが、ただ田窪先生のように、まさにこれは溶解体験なしには、世界とわが身を重ねないことには成り立たない美術制作の世界があると僕は思っています。田窪先生、例えば時間の経過を忘れて絵に夢中になってしまったみたいなことはないですか。

田窪：それは子どものときですか、今ですか（笑）。

水島：今、です！

田窪：年齢のせいで昔ほど集中力は続かないのですが、われを忘れてというのは、常に描

いているときはそれに近いですかね。

永田：無我ということですか。

田窪：いや、そこまででではないと思いますが、意外と無我ではなくて、そそっかしいほうだと思います（笑）。作品をつくっているときは、電車の中でもずっと、携帯の画像だとかそういうものを見ながら。バスに乗っていても、歩いていても、常に絵のバランスを考えたりしているので、ちょっとその溶解体験というのと種類が違うかもしれないですが。無我だったら危ないですから、車に当たったりするので。そこまででではないのですが、そそっかしく、何か忘れ物をしたりすることは多いです。

永田：子どもが絵を描いているときに一体化する、子ども独特の力、一体感というか、一体感を持つ力ですよね。大人にはないのかなと思いながら、先ほどの水島先生の話を聞いていました。それでふとした光景が私の中に浮かんできました。ちょっと変な話をしていいですか。こんなパブリックな所でいいのかどうか分かりませんが。この企画をコーディネートさせていただいて、いろいろな方が「黄金の大木が広尾にできる」というううわさを聞き、私の所に問い合わせがきて、何人か、当時は工事現場でしたがお連れしました。
そのときに「どうぞ」と言って、皆さんが今日お入りになった 4 号館、この建物のエントランスにスーッと入っていくと、吸い込まれるように壁の方に行ってしまうのですね。それを私は後ろからいつも見ていて、「人間は語りかけられる存在なのだな」というのを何度も思いました。多くの方々があの「黄金の林檎」、この絵に語りかけられていると思ったのです。そしてしばらく経つとこの絵と対話をしています。多くの方が対話をされているというのを目撃しました。
さらに変なことを言っていいですか。黄金だからかもしれませんが、多くの方が、それぞれの人生の中で、今、このときを祝福されているような瞬間を目撃しました。この絵は何なのだろう、この絵の持つ力は、と思って、溶解体験というのはひょっとしたら子どもだけではなく、アーティストにも、そして見る側にもあるのかなと思った次第です。その辺、水島先生はどうですか。

水島：例えば子どもたちは金色が大好きです。金色はカラーシステムに属する色ではないですよね。材質的なものの属性に関わる視覚的現象なのですが、やはり色の 1 つのシステムから外れたもの、スーペリアなもの、イッツ・スペシャルな存在。で、子どもたちは、例えば色紙があると、「金色！」とか真っ先に取りに行くわけです。そこに何か直感するものがある。卓越したものがそこにあって、そういったものに心が惹かれるのかな。先ほどのムステリアン人たちが黄鉄鉱を集めていたという事例と同じように、そこに 1 つのスペシャルな美的な世界が現出している。言ってみれば人間はやはり身体的な動物ですから、その感覚性とか、五体がその中に響応するものがあるのでしょう。先ほど田窪先生が、石を割りながら、ここに関わられた皆さんが 1 億年、2 億年という時代を、時間を現出されているのではないかというようなお話をされましたが、子どもたちの肉体、身体を通して、まさにそういったイメージ世界が現出されている位相は「黄金の林檎」と 1 つ通底する部分なのではないかという気がします。

永田：カトリックの大学に勤めながら信者ではない私が、こんなことを言うのはなんですが、先ほどの「祝福されている」、そこのスーペリアルな色に包まれて、たわわなこの「黄金の林檎」が降り注ぐようにこれを見に来た人を祝福している。そんな場面に幾度か出くわしたことがあります。変な言い方ですが現代の教会、または「教

会性」みたいなものが、あの空間にあるのかな、なんて思ったときがありました。田窪先生のご講演の中で、確かイタリアのラヴェンナのモザイクに影響を受けられて今回の作品も創られたということですが、その聖なるものは創られたときに意識されているのでしょうか。

田窪：そんな大それたことは思っていないので…。今、皆さんのお話をお伺いしていて思ったことは2つあります。1つはその溶解性、一体化するみたいなもの。それは当然、作家にもあるでしょうし、永田先生がおっしゃったように、観客、見ている人もその現場へ入ってくると、その空間に一体化されるというか、溶解というのでしょうか。そういうことがあると思います。
それで2つ目は、子どもとか大人とかという話をされていたと思うのですが、以前、僕の先輩で岡本太郎という作家がよく言っていたのは「『なんだ、これは！』という子どものような絵、常識に縛られない自由な作品がいいのだ」というようなことです。先ほど水島先生が映像を映した中で、僕はショーヴェだけはもちろん、アクアラングをしょっていかなきゃいけないので入れません。ラスコーとそれからアルタミラは見ています。洞窟の中に入っていくと本当に何とも言えない一体感で、ダ・ヴィンチが芸術は「精神のもの」と言っていたとご紹介しましたが、ロマン主義の巨匠でウジェーヌ・ドラクロワというフランスの画家が「絵画というのは、画家の魂と、それから見る人、観客の魂の間に架ける橋である」と。それは詩人のランボーとか、音楽家のベートーベン、そういう人たちもそれぞれ同じようなことで言っているということをルネ・ユイグという人が書いています。ドラクロワではないですが、画家というのは自分の自我がありますので、いろいろと表現したいと思っていますが、画家の魂と見る人の魂が1つの場を共有しながら一体化するというのが、最も幸せな世界じゃないかと思います。それは音楽でも、演劇でも、いろんなジャンルであり得ると思います。
それでもうひとつ、ラスコーに入ったときにこれは果たして子どもが描いたのか、大人が描いたのか。僕は大人だと思います。作家と観衆というのはある意味、個人個人、生きている人はみんないろいろな魂を持っていて、その一体化できる瞬間に立ち会ったときに、本当に幸せな気持ちになるのではないかと思います。

永田：ありがとうございます。
ということは私が見た、出くわした、あの祝福されていた背中の人たちは、田窪先生の魂とご自身の魂が交流していたということですね。「黄金の林檎」はとても深い絵だなと改めて思えてきました。
「どうしてこれが共生なのか」、一般には、世界中の石がこの絵には集まっているわけです。緑は中国、白はギリシャ、茶色はインド、あとは多くの日本の石も入っていると聞いております。そういう違う色、そして性質の石が集って、交わらずに1つのハーモニーをつくっているということで共生の象徴なのだろうといわれています。
ただ、先ほどのお話を聞いて、田窪先生はこの絵に深い意味を込められて、意識的に、または無意識的につくられたのかなとも思います。例えば今日、私が最初にご挨拶をさせていただいたときのスクリーンにパステル画が映っていました。巨大な同寸、同じ大きさのパステル画です。「幻のパステル画」といわれていますが、それをまず同じ場所に貼って、それから地面に、床に石を置いて、アーティストの皆さんのお手伝いの下に完成させて、パステルを取って、石を集めた板を壁のほうに貼っているということですね。なぜパステル画をわざわざ取ってモザイク画なのかというところもちょっと聞いてみたいです。田窪先生、いかがですか。

田窪：第 2 部は教育の話だと聞いていたのですが、あまり僕の話ばっかりしているのも皆

さんがしらけちゃうと思うのですが。僕は特にフランスの小さな礼拝堂を再生するので10年少し現地にいたのですが、そのときに屋根の問題とか、床の問題とか、壁の問題とかいちいち引っ掛かったときに、壁のときにはポンペイの秘儀荘の赤が見たいと思ってナポリに行ったり、ラスコーへ行ったりとか、マティスの南仏にあるロザリオ礼拝堂ですね。イタリアのジョットのスクロベンニ礼拝堂もですが。日本にいたときにはいろいろと画集は見ていましたが、本物を見たことがない。それで本物を見ると、これは自分が決めるのですが、作家の良し悪しというのは自分の中でできてきて、それでマティスの礼拝堂なんか僕はもう10回近く行っています。マティスは最近の作家ですが、ラスコーは1万7千年前。ショーヴェは3万2千年前。そういうパッションというか、情熱みたいなものをみんな残してくれているのかなとそんな気がして。時空を超えて幸福な気持ちになります。石というのはもちろんその原点ですし、ラヴェンナで見る前に、よく南仏なんかの円形劇場とかに行ったりすると、ローマ時代の床にあるようなのが、かすれてありますよね。イタリアのホテルだと床はそのままガラスを張って、昔のものを見せたりしている部分もあります。日本の木の文化とはまた違って、石の文化というのはかなり2,000年も、西アジアからいえばそれこそもっと3,000年、4,000年、エジプトなんか5,000年と続くわけですから、本当に人類の先輩たちのパッションがまだ生きている。もっといえばその死骸、イヌもネコも含めて、それが石になる。
ずいぶん前の話ですが、ロジェ・カイヨワというフランスの作家の『石が書く』というきれいな本を手に入れて、文章ももちろんそうですが、石を割った断面を見て、本当に感動しました。いまだに好きな本です。石は自分で作ることが出来ない。悔しいですが、ダ・ヴィンチもミケランジェロも誰も作ることが出来ません。自分でできない世界というのが絶対あります。それはひょっとしたら、本当に今、先生たちが一緒に関わっている子どもたち一人一人かもしれないし、子どもも大人もなくて、人間という感じがします。人間だけではなくライプニッツ的にいえば、イヌもネコも意識があるというような言い方をしていますが、そういうことでいえば、動物も植物も本当に意思があるのではないかという。そういう意味では上さんたちと仕事をさせてもらって、この作品で僕は初めて石を使って、ちょっと自分を超えた、遠い夢を見させてもらいました。

永田：人間を超えた存在として石と向き合って、皆さんはこの壁画を創られたということですね。やはり石の時間にはとてつもなく長いものがあります。上さんからも石を割るごとにそうした時の流れを感じているというお話も聞いたことがあります。我々は悠久の時の流れの延長線上、すなわち現代に生きているわけですが、田窪先生はこの大画を創られたときに現代社会、またはその現代社会の行く末みたいなのを意識されてつくられているのでしょうか。

田窪：不勉強で申し訳ないですが、個人的な話ですが、先ほども作品を作っているときにわれを忘れるとか、それから今の、作品をつくりながら未来についてというのはあまり、僕には正直言って全く想像がつかないです。明日のことは分からない。だから、ゴーギャンはすごいなと思っているのです。彼は「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」という絵を描いています。僕は過去と現在については感じることが出来る。しかし、未来についてはどこへ行くのかちょっと分からない。日本だけかもしれないのですが1970年ごろから、すごく時間がタイトになって、24時間街中に電気がついていて、非常にせわしない時代になってきて、知性とか理性とかという意識が進化しているのかもしれないのですが、感覚・感性・情熱そのものが少し希薄で窮屈な時代になってきているのではないかという気はしています。これは僕らの年齢とか、僕らよりちょっと上の先輩たちは特にそう思わ

れるかもしれませんが。日本でいえば大正ロマンとか、戦前のその文学的な世界、それから戦争を挟んで、いろいろな先輩たちがいろいろな文化を築いてくれたと思います。今は生活全てが便利にはなっていますが、昔と違って芸術とか感性とかそういうものがちょっと劣勢な時代かなという気がします。特に、表現行為における未来を予測することが僕自身には難しい。「今、第 4 の産業革命だ」とか言っている経済学者もいますが、僕は明日のことについて 18 世紀の産業革命以前の人々が「現代」を想像できなかったように非常に推測しづらいと思いますね。

永田：ありがとうございます。知性とか理性とかではなくて、感覚・感性・情熱が非常に窮屈になっている時代であり、われわれはその中に生きているのだという言葉がとても印象に残りました。
さて、この辺で後半、巻きを入れて、最初にお約束した教育の話もできたらと思います。実は先ほどの溶解体験も、それで今、田窪先生がおっしゃった感覚・感性・情熱と、パッションということも、現代の教育が取りこぼしてきた、または意図的にどこかに置いていったのではないかという気がしてなりません。そういう意味で先ほどの水島先生がおっしゃった溶解体験とか一体化するというのは、理性的に隔て分けて、それを分析対象としていくという教育の在り方とはちょっと違うのかなと思います。そういう教育の在り方が重要になってきている現代において、またはあの絵を、この「黄金の林檎」の大作をどういうふうに水島先生は教育の現場で生かしたいと思いますか。

水島：まず具体的には子どもたちに来てもらって、田窪先生のこの絵を見てもらう。何よりも体験してもらう。そこから全てが始まりますので。やはりわれわれはついついモザイク的なもの、石のモザイク的なものではなく、非常に浮ついたイメージの集積の中で、この情報化社会を生きていると思います。そうではなく、実際に感覚することが尊くて、そこから全てのものを立ち上げなければ、われわれの社会というのは本来、成り立たないはずなのですが、そこが非常に脆弱になっていると思います。その辺りの話をすると時間が足りなくなってしまうので割愛させていただきますが、いずれにせよ、近代の装置としての学校というのは目的意識に満ちて、解答があるというところを最終地にしながら、全ての教科、全てのサブジェクトを推進してきたところがあります。解答を当てはめる生き方ではなく、人間が人間として主体的に生きていくために本来どうあるべきか、やはり今一度ここで、何のために教育が在るのか、また、そこの方法論みたいなものをこれから模索していきたいなと。そのための素晴らしい教材を提供していただいたと思っています。

永田：ありがとうございます。人間が人間として生きていく存在のための教育、つまり人間として‘在る’ための教育が大切なのだということですね。近年は、大学教育ですら、人間が何かになるための、また何かをするための教育だということばかりが先走ってしまって、合理的なシステムの中で大学教育も変わってきている現実があると思います。今、水島先生の、「人間が人間になるための教育」、まさに私の中でドンピシャで重なったのは、ユネスコがそれを「learning to be」、人間が人間になる、もしくは「人間存在を深めるための教育」として 1970 年代から主張してきたことです。グローバル化の時代になって、さらに先ほど田窪先生がおっしゃった知性とか理性の教育、知るための教育や技術教育、つまりスキルを身に付けるための教育ではなくて、「存在」のための教育が必要なのだということを、実は先週、ユネスコ本部に行っていたのですが、グローバル化に危機感を抱く専門委員が声をからして語っていたのを思い出しました。
皆さんが今日、この建物に入る左側に、「BE＊hive」という名前が付いた展示・ワ

ークショップのスペース、昔の JICA「地球ひろば」があります。その命名は、‘BE’というのはハチの‘Bee’と重ねているのですが、‘Bee’ではなくて‘BE’なのです。ダブル e ではなくて、E が 1 つです。それは先ほど申し上げたユネスコの人間存在を深めるための学び、まさにその学びがこの世の中で必要で、そういう学びや教育をグローバル共生研究所としてもやっていきたいというような話の中から生まれた名前なのです。まさにそういう意味では、「黄金の林檎」がグローバル化でせわしなくしている私たちを立ち止まらせ、存在レベルでの出会い、すなわちそれまでの人生で出会ったことのないような異質なものとの出会いをもたらすきっかけをとなり、BE＊hive で学びを深めていくのが求められているというふうに思いました。
田窪先生、そこら辺は教育の話ですが、実は田窪先生は非常に教育に造詣が深くて、教育論を語り出したら、特にお酒があったら止まんないぐらいだと思います。
今、実は文科省をはじめ、アクティブ・ラーニングという、活発に学ぶことの重要性が叫ばれている昨今ですが、先生にとって人間存在を深める本当の教育、または本当の学びというのはどういうことでしょう。

田窪：せっかく永田先生に振っていただいたのですが、僕は教育というのは、今までほとんど常勤の先生になったことがない人なのであんまり偉そうに言える立場ではないのですが、先ほども高階先生がずっと「黄金の林檎」も含め、3 つのリンゴですか。話を伺って感銘を受けていたところです。4 つ目のリンゴが遺伝子操作になってしまうのか、その辺が僕は疑問です。先ほどちょっと、「第 4 次産業革命」と軽く言いましたが、もうドイツではそれを先駆けてやっている、いわゆる IoT を使いながらコントロール、管理していったりすることかもしれないなと思うのですが。
僕はギリシャ神話とか、それから聖書、画家ではクラナッハがいて、ルーベンスがいて、それからセザンヌがいて、ゴーギャンがいて、現代につながっています。僕はさっき、「ヨーロッパのいろいろな所を制作の必要上で見て回った」と申し上げましたが、例えばロマン主義のちょっと前ぐらいですか。グランドツアーというのがヨーロッパにあったと思いますが、そういうことというのはやはり僕は必要なのではないかと。ゲーテなんかもイタリア紀行を書いているし、それから日本でも和辻哲郎が「イタリア古寺巡礼」を書いています。だから、日本とはまた違った意味でかなり残っている文化を、それからラスコーなんかも含めて、考古学も含めて、そういう歴史というか、現場に直接出向いて行って耳を傾けて、昔の人の魂を聴き取るような教育というのは、片一方で必要なのではないかなと思っています。
それでもちろん、創造的で新しいことを考えていくというのも大事かもしれませんが、僕は美術の世界で申し上げますが、先ほどの高階先生の映像を見ていると、それひとつひとつの作品が、例えばリンゴの実のような気がするのですね。だからこの「黄金の林檎」のモザイク作品がどの程度、みんなが感じてくれるか分からないですが、そのギリシャやローマの話からいえば、まだ 2,000 年やそこら未来の話だと思いますが。
ある日、水島先生たちが小学生とか、中学生とか、高校生とか、聖心女子大の学生とかが、ここへ来たときに、あの鉄の床の所に、何かころんと「黄金の林檎」の実が落ちているような、それを見つけてもらうようなことを想像しています。抽象的で申し訳ないのですが、昔のラスコーの人達は洞窟の向こうに何かを見つけていたのではないでしょうか。そしてその後の人が絵を描き、さらにその後の人がイメージを重ねていった。「人と自然との交感」。これが僕は、ベンヤミンの言うアウラではないか思います。だからそういう感性とか感情を超えた存在、「何だか分からないもの」。いわゆるライプニッツが言う「何だか分からないもの」をいつも頭に置きながらこのグローバル共生研究所が感性の容器になってもらえればうれしいなという気がします。

永田：ありがとうございます。とかく窮屈な世知辛い世の中で、どういうふうに本物の教育というのを死守していくかということを、この絵は示唆していただいているのかなということを思いました。
先ほどおっしゃったベンヤミンのアウラは存在の重さみたいなものだと思いますが、そういうのが教育の中でどれほどわれわれが受けとめて、学生たちと一緒に試行錯誤をやっていけるかと…。グランドツアーもそうだと思います。そういう遊び、創造性のある、隙間性のあると言っていいでしょうか。それがいつの間にか教育から消えつつあるというのはやはり、われわれは田窪先生の言葉、そして「黄金の林檎」から教えていただいているのかなと思いました。
最後になりますが、先ほど「この林檎は幾つあるのかな」という質問がありましたが、もう 1 つ、興味をそそられる質問があります。それをもって今日はお開きにしたいと思います。その質問は何かと言うと、「『黄金の林檎』に種はありますか」という質問です。田窪先生、いかがでしょうか。

田窪：花田清輝という美術評論家がアヴァンギャルド芸術論という本を書いておりまして、その中に林檎に関する一考察という 1 章があります。その中で或る画家が岡本太郎に「林檎の中にイデオロギーがはいっているのか?」という話を問い掛けて、岡本太郎は「イデオロギーがあるかないかは知らないが林檎の種が入っていることは間違いないだろう」と答えたと言う話から出発しながら、花田清輝はセザンヌのリンゴとダリのリンゴから話を進め、最後はウィリアム・テルの矢を射った瞬間に収斂しています。ですから僕としては、花田清輝の林檎論というものの中に種が見えないので、そこら辺が喉に引っ掛かっています。
それで今日の高階先生のお話をいろいろと伺って、少し落ちる気もしたのですが、やはり私の「黄金の林檎」の中に種はあるかと言ったら、ありません。種をつくっていただけるのは、多分、今日来ていただいている人たちだし、今後、本当にこの作品が何か 1 つ、感受性を共有している人たちが出てきたときにそこで初めて種ができて、またどこかで実がなっていくのではないかと思っています。特に明日の見えない作家なので、今は「黄金の林檎」に種は入っていません（笑)。

永田：ありがとうございます。

田窪：すいません。（拍手）

永田：今の言葉を聞いて、もし種というのが生産性の象徴であるとすれば、「大学というのは、この社会の中の生産関係から孤島のように、小島のように浮かんでいることが大切なのだ」ということをある詩人が言っていたのを思い出しました。まさにそこに大学がそういう存在でいられるか否かがこの作品、そして田窪先生の言葉、そして水島先生が伝えて下さったメッセージからわれわれが受け取った宿題なのかなと思います。（拍手）
ちょうど時間になりましたので、ここでお開きにしたいと思います。いま一度お二人に、水島先生、田窪先生に拍手をお願い致します。ありがとうございました。
それではお開きの時間となりました。
最後に、グローバル共生研究所所長の大橋正明教授から皆さんにごあいさつをしたいと思います。大橋先生、よろしくお願い致します。

むすびの言葉

聖心女子大学
グローバル共生研究所所長
大橋正明

今日はご来場いただきましてありがとうございました。今紹介していただきました、このグローバル共生研究所の所長を承りました大橋と申します。普段は、この大学の人間関係学科で国際開発学を教えております。

多くの方がこの場所を覚えていらっしゃる方がいらっしゃるのではないでしょうか。今から約 20 年前は青年海外協力隊の隊員たちがその訓練所として、この場所でまさに飛んだり跳ねたりをしていました。その後、JICA の広尾センターになりました。

広尾センターのときには、私はいわゆる NGO の出身の人間なので、ここの場所を無償で貸していただいて、いろいろなイベントや会議室に使わせていただきました。

ところが昨年の 1 月にこの建物が本学のものになるということになりました。それでこの建物をグローバルプラザという名前にして、3 階・4 階・5 階は国際交流学科と人間関係学科が入るということになりました。ここがちょうど中間の場所で、1 階と 2 階がグローバル共生研究所になっています。

JICA の時代には、入り口を入って左側には「地球ひろば」という学びの場があり、右側には多国籍のおいしい料理が食べられる場所でした。

「それを上回るものにしろ。」と言われまして、今回、正面には素晴らしい絵ができたわけであります。今回の場所の名前も、既に私どもの副所長の永田が申し上げたのですが、この「黄金の林檎」ができたことで周りのネーミングが決っていきました。「黄金の林檎」の左側「地球ひろば」があった場所に、「BE＊hive」という学びの場をつくりました。この BE というのは人間存在であり、hive というのはハチの巣という意味、つまり育つ場所です。日本で林檎が実るのは、その多くはハチのおかげです。今、人間が受粉するよりも、ハチのほうがよっぽど多く受粉をしています。

さらに入って右側、JICA 時代は「フロンティア」と言う名前のカフェがあって、多国籍料理を食べ、世界のお酒も飲めて、小さなパーティーもやれました。今回は、カフェ・ジャスミンという名前にしました。花の名前のジャスミンです。これはペルシャ語で「神様の贈り物」という意味があります。本学の周辺にはいろいろな文化の人たちがいらっしゃいますから、肉を食べない方もいらっしゃれば、ポークだけを食べないという方もいらっしゃいます。そういった多文化の料理を提供できるような場所にしました。またパーティーもしていただけます。無農薬といいますか、大地の会の野菜を使った料理をお出しております。

私どもとしては聖心の学生、あるいは若い人たちが全国からやってきて、ここの「黄金の林檎」を見ながら、BE＊hive で育っていただいて、あるいはエネルギーが必要だなと思えばジャスミンでちょっとエネルギーを供給していただいて、花粉のような学問や素養を身に付けて、あちらこちらでまた花を咲かせていってほしいと考えております。つまり 1 階部分のコンセプトは、自然との共生という形でネーミングさせていただいております。

さて、研究所としては、3 つの機能を果たしていくつもりです。1 つはその BE＊hive で良質な問いとか課題に出会って、もっと勉強してみようとか、自分で活動してみようという気持ちになることです。

本当に共生を実現するためには向かいあわなくてはならない様々な問題があります。これについて、研究所の準備に当たった私たちはいろいろな議論をしました。「必ずしも美しい共生じゃなくてもいい。お互い憎しみ合っても、お互いに生きていかなくてはならない」というような共生もある、といった話をしました。そうしたことにしっかり出会って、研究所のもう一つの機能である学びとか研究に移っていってほしい。

３つ目は、ここで学生や市民団体や地元の人々がいろいろな活動をするような場所になっていってほしいと思っています。前の JICA の時代に比べれば面積は限られておりますが、幾つかのスペースは地元の方や NGO・NPO の方、社会を変えていこう、いい方向にしていこうという人たちのために使っていただくようなスペースとしても提供させて頂くことを考えております。ただ、まだ完全ではございません。10 月 14 日の土曜日にオープニングのセレモニーをする頃には、完成しているはずです。

ぜひ、またそのオープニングのときには皆さんにまた集まっていただきたいと思います。今日はプレ・オープニングですが、本当のオープニングを一緒に皆さんと祝いたいと思います。そのときは多分、林檎ももっとおいしくなって、みんなにそれを食べて頂きたい、と思っております。

本当に田窪先生、今日はありがとうございました。皆さんにも感謝申し上げます。ありがとうございます。

聖心女子大学グローバル共生研究所 創設記念プレ・イベント
「黄金の林檎(Le Pommier d'Or)」完成記念シンポジウム
自然との共生 ― 古今東西

2018 年 5 月

〒150-8938　東京都渋谷区広尾 4-2-24 聖心グローバルプラザ
聖心女子大学グローバル共生研究所
TEL: 03-3407-5811

※文章・画像等の内容の無断転載及び複製等の行為はご遠慮ください。